

グローバルシティズンシップを育てる 授業実践を目指して

— コラボレィティブ・アクティブラーニングをもとに —

大池京子

Aiming at the Teaching Practices which Foster Global Citizenship through Collaborative & Active Learning

Kyoko OIKE

As English teaching professionals living in this global society, we strive to respond to the needs of the times. However, it seems to be of utmost importance to first agree upon a shared principle from which each teaching method is derived. In this paper, the author focuses on the significance of fostering global citizenship. She then examines the effectiveness of her teaching practices, in terms of student discussion, creation of global event materials and incorporation, and mini research project presentations. Starting from a rather narrow scope, she aims to derive some teaching essentials from continual practice and research using student feedback. Student feedback shows the positive effect her teaching methods have had on fostering global citizenship.

key words: global citizenship education, collaborative active learning

1-1. はじめに

英語教育が、目の前にいる学生と、彼らが巣立ち行く社会に果たす役割は何であろうか。これは、筆者が問い続け、長年その答えを模索し続けている問いである。教員は、シラバスに 15 週間を通してどんなゴールに向けて学生を育てるかという目標を設定する。ここ数年、筆者は、シラバスの「授業のねらい」に、「グローバル化した現代に生きる若者として、世界で共通する様々な問題を取り上げた記事を読むことを通して、視野を広げるとともに、自分の暮らしと関連付けながら、分析的かつ批判的に思考し、自分の意見を発信する学習活動を通して、主体的に行動する自立した学習者に育つことを狙う」としてきている。筆者は、それに加えて、講座スタート時にアンケートを行い、個々の学生の状況の把握に努めている。また、授業始めの呼びかけとして、「教室、クラスメートは家族のような learning community です。(Ocampo, 2016) 同じゴールを目指し、支え合い、間違えを恐れない、助け合う仲間になっていこう。」と伝え、ラポール形成を図っている。そこでは、「生徒は英語を学ぶ旅の途中であり、沢山間違えることは、上達のカギ」として奨励される。(Ocampo, 2016)

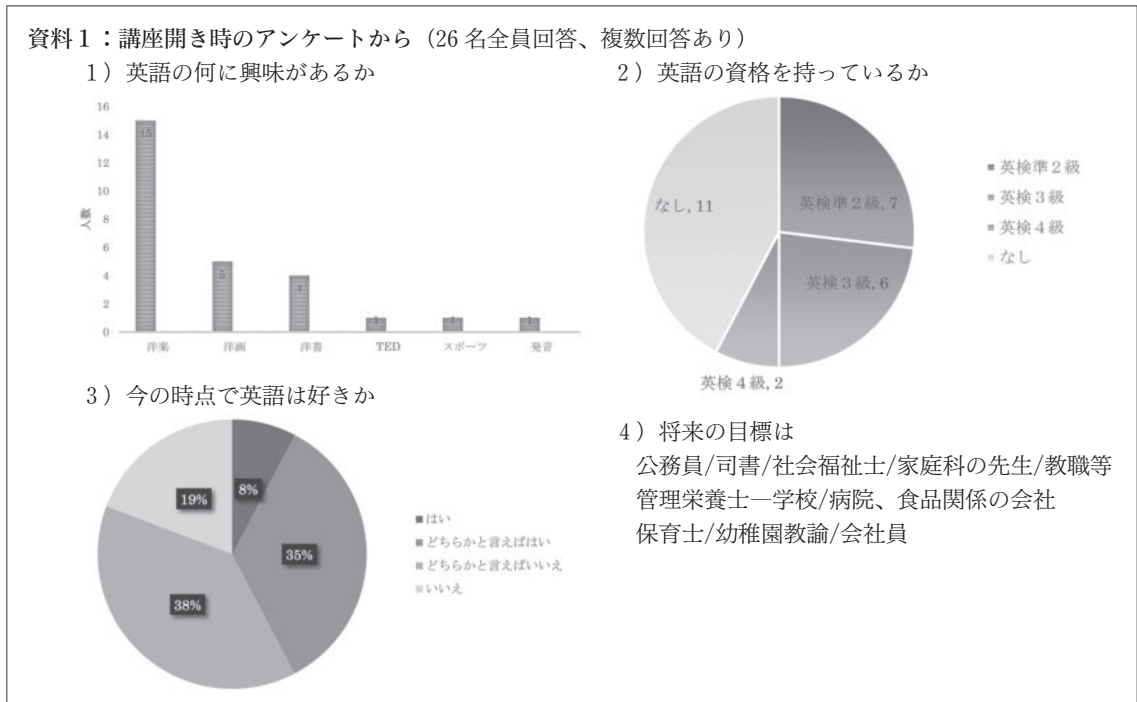
所属：

¹ 藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師

¹ Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University

講座スタート時アンケートの中から、今レポートに関わり、4つの設問を抽出し、その回答を集約した。設問と回答は以下の通りである。(資料1)

- 設問 1) Do you have any interests in English songs, films, poems, books, sports, etc.? If so, what?
英語の何に興味がありますか
- 2) Do you have any English qualifications, e.g., Eiken, TOEIC, TOEFL, etc.?
何か英語の資格を持っていますか
- 3) Do you like English at this point?
今の段階で英語は好きですか
1. Yes はい 2. Rather more yes どちらかといえばはい
3. Rather more no どちらかといえばいいえ 4. No いいえ
- 4) What is your future goal? Any fields you want to work in?
将来の目標は? 或いは、どんな分野で働きたいですか



アンケートの最後の初回授業への感想では、「英語は苦手だが頑張ろう!」という前向きなコメントが大半であった。しかし実際の授業では、消極的ともとられ得る、外に顕在化しづらい学生の姿勢が多々見られた。そこで、どんな学びや気づきをしているのかを1-min. summary sheet (大池、2009)で把握することに努めるとともに、授業では、毎回少しずつでもペア、グループ活動を入れ、学び合いを促してきた。また、将来活用できる多様な learning strategies を伝え、分かり易く楽しい中にも、自律した学習者に育つことを念頭に、どう学ぶのか、何故学ぶのかを伝え、motivation を維持してもらうことに努めた。

さらに、今、世界のどこかで起きている出来事を共有し、考え、意見交流をすることを通して、近い将来に向け、今を目的意識的に生きる力へと転化していくよう教材を作成し授業で展開してきた。

クマラヴァディヴェル (2001) が呼びかけるように、教育の現場で日々実践する教員が、日常的に実

践を振り返り、目指すゴールに向け、研究と研鑽を積み続けることは、混迷する現代社会で英語を教える立場にある者達に、新たなカリキュラム構築の可能性を生み出す力となる。(Kumaravadivelu, p.541)

このレポートの目的は、筆者の授業実践を、対話活動、グローバル教材、ミニリサーチプレゼンテーションプロジェクトの観点から振り返り、現代社会で英語を教える際の、目指すゴールの方向性を探るものである。ツールとして、アンケート、ワークシート、1分間サマリーシート、リスナーシートを用いる。狭いスコープで実践を振り返り、そこから次の実践研究に向けて、さらなる課題や要素を導き出すことである。

1-2. これから求められる教授法とは

英語教育において、これまで様々な teaching methods が提唱されてきている。それぞれの長短を学びながら、教員達は教室の学生の状況に合わせ、取捨選択しながら、授業展開をしていく。クマラヴァディヴェル (2001) は、Postmethod Teacher の役割について、次のように述べ、多忙な日々埋没せざるを得ない第一線の教員たちを激励している。

…practicing teachers have neither the time nor the energy. Rather, it involves keeping one's eyes, ears, and mind open in the classroom to see what works and what does not, with what group(s) of learners, and for what reason, and assessing what changes are necessary to make instruction achieve its desired goals. Teachers can conduct teacher research by developing and using investigative capabilities derived from the practices of exploratory research (Allwright, 1993), teacher research cycle (Freeman, 1998), and critical classroom observation.

(Kumaravadivelu, 1999a, 1999b). (Kumaravadivelu, 2001. p.550)

広石 (2003) は、「教育活動は、あくまでも相互作用・相互行為である」とし、それは、「絶え間ない自己変容を他者との関係性の場で更新していくコミュニケーションの行為による経験の不断の再構成である」と述べる。(p.214) さらに、「未来に向けて能動的に生きる市民性を育てる相互教育としての教育」では、「知ることを学ぶ (learning to know)、なすべきことを学ぶ (learning to do)、人間として生きることを学ぶ (learning to be) に加え、ともに生きることを学ぶ (learning to live together) 必要がある。われわれが必要とするのは、対話による学習を通じて、自らと他者、あるいは現実世界との関係を認識し、社会的政治的な責任主体へと成熟できる教育である」(p.224) と述べ、新たな教育様式の模索に期待を寄せている。

Learning community の仕掛け役である教員が、自らもグローバルシティズンシップ (世界市民性) とはと、常に自分に問いかけながら、学生達が世界とつながる窓を着実に広げていく支援をしていくところ、英語教育の醍醐味ではないだろうか。

2-1. グローバル教材作成の意義

筆者は、「英語の持つ力や可能性」を考えた時、ストレートに学生の心に届き、気づきを促し、他者に共感できる教材と出会わせたいと考え、コア教材 World in Motion を補足する形で、今年度の前期はモハメド・アリの人生の選択と語録を様々なメディアから教材化した。後期は、オリンピックがタイムリーな話題であったことから、英字新聞 Asahi Weekly から選手たちの語録マッチングクイズを作成。講座始めの導入、ice breaking と teamwork の動機付けとしてペア活動、チーム対抗活動とした。翌週には、Refugee team の記事から、mini worksheet を作成。English Newspaper の構成、Previewing の仕方、動詞を捉えてペアで Reading aloud といった活動へ発展させ、記事についての感想を書く事も含

め、翌週までの自習課題とした。翌週の授業の中に、グループ交流とクラス交流タイムを設けた。(資料2)

資料2：Refugee article (難民選手団) 読解活動後の感想シートから (26名。複数回答あり)

1. 諦めず命懸けで人を助ける勇気がすごい	15名
2. 同い年の自分にはできないだろう	9名
3. 逆境の中、諦めずに前向きな生き方に感動した	8名
4. 難民選手団を結成したオリンピックは素晴らしい	5名
5. 自分が平和な環境でやらせてもらっている、恵まれていることを実感した	4名
6. 生きる苦勞が伝わってくる	3名
7. 難民選手団のことを改めて知った	2名
8. ものすごく応援したくなった	2名
9. 私達は、命懸けで何ができるだろうか	2名
10. 世界で起きていることを学べた/ 政変はなくなってほしい/ 母国にいられないことが 悲しい/ 驚きだった	各1名

集計結果に見られるように、学生は自分と同世代の難民マルディーニさんの命懸けの祖国脱出の様子やオリンピック参加に至った経緯と、もう一人の難民選手ポボルさんの15年に及ぶ家族と離れ離れで生死が分からない状態での、オリンピック参加の意義や、オリンピックが映し出す世界の状況に触れて、オリンピックの表舞台からだけでは窺い知れない世界各地の現実を、一步深く見つめ、様々な気づきをするきっかけになっていたようだ。

2-2. 対話・ディスカッションの意義

如何にしたら、もう一步深く教材やトピックを自分の中で咀嚼し、深い学びにつなげられるのだろうか。また、如何にしたら、個々の学生が生き生きと学び、お互いから触発を受けて、学ぶことの醍醐味を実感し、次の学びの動機づけにつながるのだろうか。これは、筆者の長年の課題であった。3学科合同で構成されているクラスでは、幾分クラスとしての凝集性に欠け、集団の中に学生の個性が隠れ、時々個々の学生の持つ多様な力やモチベーションを引き出しづらいついていた。近くに座るクラスメートとのペア学習やグループ学習は継続的にしていたが、ある時、各列からそれぞれメンバーを構成してグループを形成し、ディスカッションを持った。その後の1-min. summary sheetには、初めてグループになったメンバーとのdiscussionが新鮮であった様子が窺える。(資料3)

資料3：1-min. summary sheet から (ディスカッショングループ構成の大きな変化の後で)

(Discussion 交流に時間を割いた為、特にコメントタイムを設けないことにした為、10名のみ回答)

1. 今まで話したことのない子と一緒にやって、色々な意見が聞けたし、多角的視点でできたので、とても楽しかった/ 刺激になった/ 早速 Unit 9 (The Wisdom of Crowds) が実感できた/ とても新鮮だった 5名
2. 話し合いがあまりスムーズに進まなかった/ 初めて話す人ともどンドン話せるようになった 2名
3. 内容が身近かでとてもやりやすかった/ 他の人の意見を聞いて学べたことも多くあるので、次回からもそれを活かしたい
4. グループワークで意見をまとめることが難しかった
5. グループの人が自分の意見を英語にしているのがすごいと思った/ 自分も英語は苦手だからこそ英語にしてみたいと思った

池田・ヒックマン・ガリソン (2014) は、教育学者デューイの実践を振り返りながら、対話の意義について、次のように語っている。

人間は生命のより深い次元から、内なる尊厳性に心広々と目覚めて行くことが重要です。そして、他者との差異から謙虚に学び合い、互いを豊かに高め合いながら、ともに成長していくことです。その確かなる道が、心開かれた対話を重ねていくことではないでしょうか。(池田, p.250)

この種のコミュニケーションとは、二人以上の人間—社会的存在が、自分たち以外の第三者の事物や人間に対して、結果として行動による一致をみる、ということです。(中略) デューイは、「民主主義をはかる基準は自由で開かれたコミュニケーションにある」と信じていました。(ガリソン, p.290)

コミュニケーションは、人間以外の自然にもありますが、「対話」つまり自己を他者の立場に置き、他者の立場から自己を見つめられる能力—は、やはり人間だけに与えられた独自の能力のようです。(ヒックマン, p.292)

Discussion への準備と、discussion 時のノートテイク、その後のクラス交流タイムを経て、時には、再度自分の意見をまとめ直すという少なくとも 2 週間に亘る作業が入るが、4 技能を駆使しながら、あるトピックについてまとまった意見を作り上げていく活動は、自分の考えを英語の文章に表出するステップを身につける活動になっているようだ。

3-1. グローバルシティズンシップ (世界市民意識) を育てるために

池田 (2016) は、国連の新目標「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」Sustainable Development Goals (SDG) の筆頭に「誰も置き去りにしない」との誓いが明記された点を評価し、また、「世界市民教育」の重要性が明記されたことに触れ、これまで以上に「世界市民意識」(Global Citizenship) を涵養する「世界市民教育」を展開するための 4 つのプロセスを推進する決意を語っている。すなわち、(1) 自分を取り巻く社会の問題や世界が直面する課題の現状を知り、学ぶ。(2) 学びを通して培った、人生の座標軸と照らし合わせながら、日々の生き方を見直す。(3) 自分自身に具わる限りない可能性を引き出すためのエンパワーメント。(4) 自分たちが生活の足場としている地域において、具体的な行動に踏み出し、一人一人が主役となって時代変革の万波を起こすリーダーシップの発揮、である。

そして、その鍵が「対話」であるとし、「対話を通して、一人一人が心の中にある世界地図を友情や共感を持って描き出していくことが、自分を取り巻く現実の世界の姿をも変えていくことにつながる」と、対話の果たす役割の普遍的な重要性を強調している。

また、Glocal Citizen を育てる、という観点から授業を振り返ると、前出の 3 氏は、対話の中で、21 世紀の大学の使命や大学教育の意義、地域との交流の意義について、次のように述べている。

デューイ博士は、(中略)「大学教育の永続的かつ有意義な帰結は、人間性の陶冶になくはならない」と明快に述べている。(池田, p.197)

私たち教員が大学で果たすべき役割は、学生たちの心に、人生の中でその時期が以下に貴重であるか(中略)刻みつけてあげることです。大学の教職員は、幅広い見識を持つと同時に、学生の知的・精神的成長に、もっとちからを注ぐべきです。そしておそらく最も重要なことは、学生たちに教えるだけでなく、学生たちからも学ぼうという姿勢ではないでしょうか。(ヒックマン, p.198)

魅力ある教員となるためには（中略）、「教育活動」と「研究活動」のあいだには、何の隔たりもないと思っています。両者は互いに高め合うものです。（ガリソン， p.200）

「世界市民」とは（中略）、生命の相関性を認識する「智慧」、他の民族や文化との差異を恐れぬ「勇氣」、そして他の国の人々の痛みにも同苦する心―「慈悲」を（兼ね備えた人であり）（教育は）それを育むための大切な機縁となり基盤となっていくのではないのでしょうか。（池田， p.248）

教育実践と研究活動は、実際時間との格闘であるが、時間を確保しつつ日常的に取り組み、その結果を、同僚教員同志で交流し、次の実践の力に変えていきたい。

3-2. アクティブ・ラーニングとは

篠原（2013）は、文部科学省が2012年6月に発表した『大学改革実行プラン』の中で、…「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解答を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」としている。個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換が必要であり、ピアサポート（相互支援）教育、PBL教育の導入を通して、主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できる…PBL教育は、「Process-Based Learning（やり方を学ぶ）」、「Problem-Based Learning（具体的課題を与えられ、選択する）」、「Project-Based Learning（研究プロセスの実践・体験・経験）」と3分類できると述べている。（p.6）

教室では、学生が英語の4技能の確かな力を身につけることのサポートをするとともに、そのプロセスの中で、できる限り、学生が主体的に取り組み、学生同士、また学生と教員が相互に、また継続的に交流をする中で、学ぶことへの真摯な姿勢と、共に学びを深め合うことの醍醐味を少しでも多く経験できるように、学習活動の精選と工夫を続けていきたい。

3-3. ミニリサーチプレゼンテーションプロジェクト

学生が「英語の窓」を通して、世界で起きている事象と自分の暮らしを結びつけ、一步深く考え、行動する機会となるように、また、テキストの各Unitで取り組んだ事柄をさらに一步深く学び合うことを目指して、講座後半に、Mini Research and Presentation Project sessionを設けている。“Good presentation has 3 components: story message, visual message and physical message.”と伝え、3つの要素を意識させた。手順としては、各自興味のあるUnitを選び、関連したsub topicを決め、インターネット等でミニリサーチをした後、1人約1.5分～2分間の発表になるよう、日本語で構成（時には原稿を作り）、シンプルな英語の原稿に起こし、提出。教員から修正アドバイスを受けて、視聴覚資料を準備し、リハーサル。発表へと向かう。Learning by doingで、リサーチとプレゼンテーションの基礎を伝えながら、自立して自分の選んだテーマに取り組む中で、これまで学んできたことを網羅し4技能を駆使して、自分の学んだことを皆に伝えていく、Active learningの取り組みである。“Make it two ways (mutual). Support each other and learn from each other.”と呼びかけ、お互いのプレゼンについて、listener's sheetの中に、簡単なチェックポイントとともに、good points, advice等を書き込み、一人の発表の後ごとに、2人程アトラングムに当て、コメントを伝えてもらった。どの学生も、自分の今持っている英語力を一歩も二歩も引き伸ばす真摯な取り組みをしてきていた。発表最終日の全体コメント集約からは、沢山の気づきと学び、クラスメートへの労いと尊敬、近い将来への抱負が溢れていて、個々の学生の成長とlearning communityとしての成長が見られた。（資料4）

資料4：Mini Research Presentation Project Listener's Sheet (複数回答あり)

- | | |
|---|-----|
| 1. 皆すごい! / 面白かった / 楽しかった / 視点とアイデアがすごい / 立ち方がかっこよい / 皆工夫していた / 個性が素晴らしかった / 表情や細部まで良かった / 先生のアドバイスを活かしていた / アクセントが良かった / 良く準備していて quality が高かった | 12名 |
| 2. 話すペースや声の音量、アイコンタクトが良かった / アクセントが良かった | 12名 |
| 3. 図や(手描き)イラストのおかげでわかり易かった | 11名 |
| 4. 沢山学んだ / 次回プレゼンの機会があれば活かしたい | 9名 |
| 5. 緊張した / 次回は資料、アイコンタクト、大きな声、ペースなど、頑張りたい | 6名 |
| 6. 10回以上練習した / 1.5時間練習した | 2名 |
| 7. 練習は自信になると分かった | 2名 |
| 8. 全員参加していた | 1名 |

4-1. Worksheet で学びの深まりと広がりをサポート

Worksheet は、Opening exchange から始まって、vocabulary や、Discussion Questions への意見をフレーズで書き出し持ち寄り、Group Discussion 中のメモテイクとクラス交流メモ、さらに、課題として時には再度自分の意見を整理し revise する(または、passage のサマリーを書く)など、授業前後も含めた learning process に学生自らが active に取り組めるように作られている。4 技能を駆使して英語や課題に取り組み、学びの方向性を示すツールとして用い続けている。上記のような取り組みをすることから、時に2~3週間に亘って使うこともある。

前期と後期では、各学生の worksheet に書き出された自分の意見(英語のフレーズ化)という視点でみると、少しずつだが着実に、英語で意思を伝える力がついてきている。self-motivated, Active learner の養成に向けて、タイムリーに feedback を与え、次の課題に向かわせることを心がけたい。

4-2. 1-minute Summary シートの活用

授業の振り返りのツールとして、「The Minute Paper」(Anderson, 2007) をモデルとし、また、大学の同僚の先生の Feedback sheet からヒントを得て作成した 1-min. summary sheet を、学生からの継続的フィードバックに活用した。記入する際の観点として、1. 今日の授業で印象的だったこと。2. 質問や難しかったこと。3. 今日の自分の取り組みへの振り返りと次回に向けて、としてあるが、授業の流れの関係で、どの観点から書いても良いとすることも多々あった。(大池, 2009)

5-1. まとめ

ここまで、今年度の実践を、グローバル教材導入、対話活動とミニリサーチ・プレゼンプロジェクトに焦点を当て、Questionnaire と 1-min. summary sheet, listener's sheet をツールにして振り返ってきた。1-min. summary sheet の意見の中で、クラスで共有したい質問や学生の気づきは、次の授業始めに伝えるようにし、また、授業展開にも活かした。筆者の授業内観察からすると、学生の様子が以前より少しずつではあるが、しっかりと理解でき、また、学生との心の交流が以前より一層双方向に、温かく流れるようになったことを実感している。また、以前は見えづらかった各学生の努力や思いが少しではあるが伝わり易くなった、また、小さな声や発表までに時間がかかりがちだった学生も、よりクラス集団を意識して声を大きく出し、笑顔が増えたように思われる。一連のフィードバックで、自分の学習活動に自信を持ち始めているのではないだろうか。

講座のまとめをした後、講座終了時のアンケートを学生に依頼した。この講座(担当教員)へのフィー

ドバックを率直に書いてくれるようにと伝え、4つの設問と自由感想を書いてくれるよう求めた。初回時のアンケートからの変化を見る為に、記名式とした為、回答しづらいことのないよう、できるだけ学生の本音を聞けるよう設問を工夫した。設問と回答を資料5に示す。

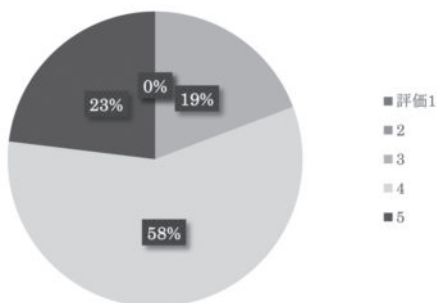
講座修了時アンケート

- 設問1) ペアやグループでの Communication Activities (例: Discussion、音読、ミニリサーチ・プレゼンプロジェクト) は、力になったと思いますか (5段階評価で、5をととてもそう思うとして示して下さい)。コメントもどうぞ。
- 2) この講座で、あなたが一番チャレンジしたと思うことは何ですか。
 - 3) 友達にこの講座 (内容) を勧めますか。何故?
 - 4) 今の時点で英語に対する思いはどれですか。
 1. 好き 2. どちらかと言えば好き 3. どちらかと言えば嫌い 4. 嫌い
 - 5) Free comment をどうぞ。

アンケートの各設問への回答集計結果とコメントから、これまで授業の中心に据えて取り組んできた Communication activities (グループディスカッション、ペア活動、ミニリサーチ・プレゼンテーションプロジェクト) は、学生の学びの広がりや深まりに一定のプラスの作用をしていることが認められた。設問4への回答では、以前より英語が好きの方向へ改善した学生が11名(そのうち2段階アップした学生が5名)、変化なしの学生が14名であったが、逆に一段階下がった学生も1名いた。学生の自主的な取り組みを、よりゆったりとした流れの中で奨励できるよう、教材や学習活動の精選とバランス良い配置に気をつけていきたい。

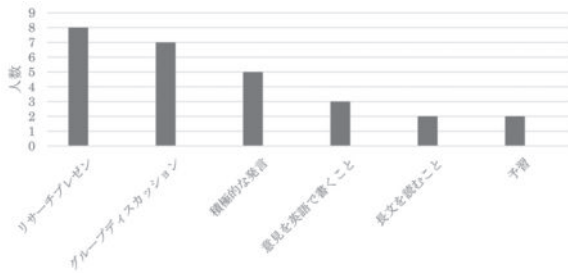
資料5: 講座終了時アンケート (26名。設問1~3でのコメント記述は自由。複数回答の場合あり)

Q1. コミュニケーション活動は力になったと思うか



- 話したりするより、文章を理解する方が身についたと思う
- 英語が苦手な私でも積極的に参加できたから/ プレゼンやディスカッションで、自分の意見を言うことに慣れた
- グループの他の人の意見を聞くことで、考えの幅が広がったり、ディスカッションの仕方を学べた/ 色々な意見に触れられた/ 色々な人とグループになり、意見を聞くことができた/ コミュニケーションができる 6名
- プレゼンをしたり、毎回音読したりして頑張った
- 自分の意見を英語でまとめてみたりする機会が (今まで) なく難しかったけど、グループの人と一緒に考えたり、話し合いができて良かった
- 受け身ではなく、授業に参加していると感じたから
- 高校の時はなかなか英語で話す機会がなかったので、ためになった

Q 2. この講座であなたが一番チャレンジしたことは何か

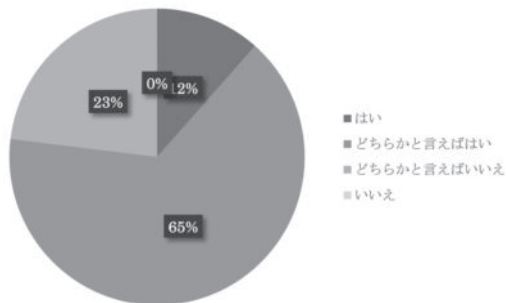


- プレゼンテーション/ 皆の前で英語でするのは初めてだった/ テーマについて調べたこと/ アイコンタクト 8名
- 色々な人と意見を交わすこと/ グループディスカッション 7名
- グループでの話し合いやペアでの音読で、自分から話そうとしたこと/ 積極的な発言、発表/ 意見を英語で言うこと
- Unit 毎のディスカッションに向け、なるべく具体的に自分の意見を書くこと/ discussion で、一から自分の力で文章を組み立てること/ 文を日本語を英語に直すこと 3名
- 長文を読むこと 2名
- 予習（宿題）をしっかりとやること/ 意味調べ 2名

Q 3. 勧める 24名 無回答 2名

- グループワークが多いので、分からないところを共有できる/ コミュニケーションが多かったから/ 英語のコミュニケーションを学べるので/ 自分の意見を相手に伝える力がつくから/ 友達との話し合いがためになるから/ 自分の意見を自由に交換できるから/ 授業に積極的に参加できるから 7名
- 色々な人と話すのが苦手な人は、少し克服できるから/ 色々な人と話す機会になるから/ なかなか自分の意見を言えない子が多いから 3名
- 英語の力がつくから/ 英語で話そうと頑張れるから苦手でも理解できる 3名
- 文章の読み込みができる/ 長い文章を読む時のコツなどが学べるから 2名
- 先生が優しく分からないところがあっても教えてくれるから/ ゆっくり進んでくれるから 2名
- ワークシートの直しやスピーチの時のケアがとても丁寧で、面倒くさがり屋な私でもやる気にさせてくれた
- 教科書の内容を学ぶ為、次に何をするか分かり易いから
- 他のクラスではプレゼンテーションといった自主的に何か活動することはやっていないと思ったから
- 色々な文にチャレンジできるから

Q 4. 今の時点で英語は好きか



資料5 (続き) (複数回答あり)

Q5. フリーコメント (複数回答あり)

- | | |
|--|-----|
| ー1年間有難うございました | 18名 |
| ー英語は苦手/ 嫌いだけど、楽しかった/ 頑張った | 5名 |
| ーこれからも精進していきます/ これからも頑張って英語の力を伸ばしたい | 3名 |
| ー丁寧な解説で、丁寧な英語の先生に初めて出会った | 2名 |
| ーとても沢山迷惑かけた | |
| ーグループ活動など皆でできる活動が多く、毎週楽しみだった | |
| ー休んだ時も心配してくれた | |
| ーTextだけでなく、DVDや新聞記事を使った授業で、色々なことを学んだ | |
| ーこれから人前で話すことも増えると思うので、この授業がいいきっかけになった | |
| ー英語をもっと話せるようになって海外旅行に行きたい | |
| ー先生の講義を受けることで少しずつだが、真剣に取り組み、理解しようとする姿勢がついた。
まだまだ英語には自信がないが、これからも頑張っていきたい | |
| ー様々な角度で英語と関わった感じがした。プレゼンは緊張した思い出がある | |
| ー4月から色々学び、プレビューイングなど今まで自分がしてこなかったやり方を教えてもらい、
問題を解く時の視野、考え方が広がった。2月7日の(ポスト)テストで習ったことを発揮でき
るよう頑張りたい | |
| ーこれからの人生に活かしていきたい | |
| ー高校の時は英語が嫌過ぎたけど、今は前よりも良いなと思えるようになってきて良かった。
英語は苦手だけど、皆と協力するディスカッションとかがあって、自分の意見とかを伝えられる
ようになったこととか、このクラスで勉強してよかったなと思ったことでした | |

5-2. 今後に向けて

現場の教員は、学生の状況を観察しながら、色々な準備や計画、授業実践、振り返りと次への準備を継続的に進めながら、意図した態度や力の育成を図っている。それは、意思決定の連続である。時に学生の実態にそぐわず失敗することもあるが、真摯に学生と向き合う時、きっと彼女達の今と未来に支えとなるような英語教育—今いる場所と世界を繋げる窓—を広げる手助けになっていくことちからとなることを信じて、これからも学生一人ひとりを温かく励ましながら、Glocalな人材の育成につながる授業実践を目指して楽しく精進していきたい。

参考文献

- Kip A. Cates, Craig Smith, & Asakawa Kazuya. (2014). Teaching English for Peace: Fostering Global Citizenship (Fostering English Communicative Competence for Peace and Friendship) JACET 全国大会要綱 53, 70-71.
- Kumaravadivelu, B. (2001). Toward a Postmethod Pedagogy. *TESOL Quarterly*, 35, 4, 537-560.
- Kumaravadivelu, B. (2006). TESOL Methods: Changing Tracks, Challenging Trends. *TESOL Quarterly*, 40, 1, 59-81.
- Hinkel, E. (2006). Current Perspectives on Teaching the Four Skills. *TESOL Quarterly*, 40, 1, 109-120.
- Ocampo, M. (2016). Brainwaves of Emotion among Japanese EFL Learners as Proof of the Effectiveness of Family Environment Mode Approach (FEMA). Retrieved from http://www.academia.edu/26870939/Brainwaves_of_Emotion_Among_Japanese_EFL_Learners_as_Proof_of_the_Effectiveness_of_Family_Environment_Mode_Approach_FEMA
- 池田大作, ガリソン, ジム&ヒックマン, ラリー. (2014). 人間教育への新しき潮流—デューイと創価教育. 東京. 第三文明社.
- 池田大作. (2016). 第41回「SGIの日」記念提言。「万人の尊厳 平和への大道」民衆の力強い連帯と行動で

- 人道の世紀開く曙光を!!」*聖教新聞*。01-26&01-27.
- 大池京子。(2009)。学生の確かな学びを保障する、より洗練された大学一般教養英語講座構築を目指して。*Language Studies*, 17, 9-15.
- 国連「われわれの世界を変革する——持続可能な開発のための2030アジェンダ」(Sustainable Development Goals)。(2015)。第70回国連総会採択文書。1-35。09-18.
- 篠原收。(2013)。グローバル人材・グローバル人材育成に向けた教養教育。*広島女学院大学生生活学部紀要*, 20, 1-15.
- 塚本美紀。(2014)。持続可能な発展のための英語教育：グローバル市民意識を育てるために。*西南女学院大学紀要*, 18, 153-161.
- 広石英記。(2003)。グローバル社会における教育の一つのデザイン。*哲学*, 109, 207-228.